

高等学校 総合的な探究の時間

「総合的な探究の時間」における「指導と評価の一体化」に関する一考察 —生徒と教師を対象としたアンケート調査の結果から—

高校教育課 指導主事 金子 勇太

要 旨

高等学校総合的な探究の時間において、生徒と教師を対象としたアンケート調査結果を基に「生徒の学習改善」及び「教師の指導改善」の視点について分析・検証し、「指導と評価の一体化」を実現するための評価規準の提案、カリキュラム・マネジメントの確立を推進する手掛かりを考察した。その結果、生徒と教師の両視点から考察することにより、具体的な改善の方向を見いだすことができた。

キーワード：総合的な探究の時間 指導と評価の一体化 指導改善 学習改善

I 主題設定の理由

2018年の高等学校学習指導要領の改訂において、高等学校では「総合的な学習の時間」の名称が「総合的な探究の時間」に変更された。この「総合的な探究の時間」のねらいとして、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月中央教育審議会）では、「高等学校においては、小、中学校における総合的な学習の時間の取組の成果を生かしつつ、より探究的な活動を重視する視点から、位置付けを明確化し直すことが必要と考えられる」としている。また、高等学校学習指導要領解説総合的な探究の時間編（平成30年7月）では、小、中学校での「総合的な学習の時間」との相違点を「総合的な学習の時間は、課題を解決することで自己の生き方を考えていく学びであるのに対して、総合的な探究の時間は、自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していく」という「探究が高度化し、自律的に行われる」という特質があることを挙げている。

「総合的な探究の時間」（以下、「総探」という。）は、2019年度高等学校入学の生徒たちから先行的な措置として実施され、より探究の過程を充実・発展させ、生徒が自ら具体的課題を設定し、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現をする学習活動を展開することが求められている。総探に関する成果及び課題に関する先行研究が徐々に示されてきているが、青森県内の公立高等学校における総探の実施を対象とした先行研究としては、大瀬（2021）が総探の推進要因について、アンケート調査を基に分析し、さらに経営的課題についてまとめたものがある。大瀬は、県内の高等学校36校を対象としたアンケート調査結果から「教員間での協働的な取組」と「管理職によるリーダーシップの在り方」の2点の経営的努力が、総探を推進する要因であるとした。また、「生徒の意識」「教科との関連性」「中学校との連携」に関する調査・分析を今後の研究課題であるとした。総探に関する先行研究において、指導方法や指導体制、地域との連携という教師の視点からのものは多いが、大瀬が課題とした「生徒の意識」を対象としたものは佐藤（2021）の研究の他、数が多いとは言えない。また、青森県の高校生を対象としたものは、筆者の知る限り見当たらない。

これらの課題を受け、本研究では生徒と教師への総探に関するアンケート調査を実施して、成果と課題を明確にし、「生徒の学習改善」及び「教師の指導改善」に繋げる可能性について考察していきたい。本研究を進めることにより、総探における「指導と評価の一体化」を実現するための評価方法の提案、カリキュラム・マネジメントの確立を推進する手掛かりについて考察する。

II 研究目標

生徒及び教師の総探の学習成果についての意識を基に、「生徒の学習改善」及び「教師の指導改善」の手掛かりを得ることにより、「指導と評価の一体化」を実現する評価方法とカリキュラム・マネジメントの確

立を推進する有効的な方策について考察する。

Ⅲ 研究の実際とその考察

1 研究協力校について

本研究では、三本木農業恵拓高等学校に研究協力校を依頼し、令和3年度入学生普通科における総探を研究対象とした。三本木農業恵拓高等学校は、令和3年に十和田西高等学校、六戸高等学校、三本木農業高等学校の統合により、新たに開設された学校である。普通科、植物科学科、動物科学科、環境工学科、食品科学科が設置されており、普通科で総探が設定されている。単位数は1学年と2学年は各1単位、3学年で2単位の合計4単位である。なお、普通科以外の学科では、「課題研究」を2学年以降で履修することになっている。

三本木農業恵拓高等学校に研究協力校を依頼した理由は、上述したように新設された学校であり、総探の実施経験がなく、指導計画等をゼロベースから構築する必要があるため、既存の枠組みに囚われることなく、「指導と評価の一体化」を実現しやすい環境にあると考えたからである。また、専門教科での「課題研究」に関する指導経験が豊富な教員が多数おり、総探における指導と比較することができると感じたからである。

2 三本木農業恵拓高等学校における総探

三本木農業恵拓高等学校では、キャリアに関する学習や地域を題材とした課題解決学習を通して、資質・能力及び態度の育成を目標としている(表1)。学習内容は「自己探究(キャリア)」と「地域探究(課題研究)」の二つで構成されており、特に後者の地域課題研究に重点を置いている。

1学年では、課題研究の実践を通して、その基礎を学ぶとともに、自己の在り方生き方について考える内容が設定されている。具体的な学習計画等は、探究活動企画委員会が示し、1学年担当の教員を中心にホームルームまたは学科単位で指導する。また、外部の教育資源を積極的に活用することも示され、地域との連携を重視した内容となっている。

3 令和3年度総探の指導の実際

(1)「自己探究(キャリア)」

4月から6月にかけては、自己の進路について考察することをねらいとした学習が行われた。

具体的な内容としては、2学年から分かれる2コース(文理総合と地域・観光)についての説明や上級学校の種類や大学入試制度の概要に関する情報を得た上で、自己のキャリアや進路について考えるというものである。これら「自己探究(キャリア)」の活動を通して、自己の在り方生き方を認識させ、次の地域課題研究を進める基盤としている。

(2)「地域課題研究」

ア テーマ設定

1学年では、探究学習の基礎を学ぶということから、教師が設定した共通テーマ(図1)の中から一つ選択し、同じテーマを選んだ4人程度のグループで、課題解決に向けたアクションプランを考察し、実行することを目標とした。

共通テーマは、十和田市がセーフコミュニティの国際認証を受けていることから、図1の4つの共通テーマに関する「セーフコミュニティ」のそれぞれの課題について考察し、アクションプランを研究する。

表1 三本木農業恵拓高等学校の「総探」の概要

目標	地域を題材とした課題解決型学習やキャリアに関する学習を通して、社会で生かす知識・技能、探究の手法、主体性・協働性を身に付け、地域社会を支える人材としての自己の在り方生き方を考えることができる。
育てようとする資質や能力及び態度	(1)各教科に関する知識・技能について、課題の発見・解決のために生かしながら身に付ける。 (2)課題の発見・解決の過程で、課題の設定、情報収集、調査・分析、まとめと表現といった探究の手法を身に付ける。 (3)一連の学習活動を通して、社会性や公共性のほか生徒同士や地域の人々と主体的・協働的に関わる力を身に付けるとともに、自己の在り方生き方についての考えを深める。
内容	大きく、「自己探究(キャリア)」「地域探究(課題研究)」に分かれて学ぶ。 ・1年は、課題研究の実践によりその基礎を学ぶとともに、自己の在り方生き方について考える。 ・2年は地域課題研究、就業等の体験学習を行う。 ・3年は、地域課題研究を行う。 ・課題研究については、適宜発表会を行う。
指導体制	・学習活動、内容によりホームルーム、学科単位で指導する。課題研究についてはグループごとに指導する。 ・農業科が併置されているメリットを生かしつつ、全教職員の協力体制により指導する。 ・探究活動企画委員会により全体計画・企画を立案する。 ・地域と育てたい力について共有しながら、連携体制を構築する。 ・外部の教育資源を積極的に活用する。
評価	・ポートフォリオを活用した評価の充実 ・ルーブリックの設定 ・教育課程に対する評価及び改善

- | | |
|---|-----------|
| 1 | 交通安全 |
| 2 | 火災予防 |
| 3 | 幼児の自宅での安全 |
| 4 | 観光客の安全 |

図1 共通テーマ一覧

イ 地域課題研究のようす

表2は、地域課題研究の12月までの学習内容の概要である。普通科発表会の後に、代表として1グループが他学科との合同発表会に参加した。

表2 地域課題研究の主な学習内容

時期	活動タイトル	学習または活動の内容
6月24日	セーフコミュニティの講義	十和田市出前講座を活用し、「とわだセーフコミュニティをみんなですすめ隊」顧問の方の講義を聞き、セーフコミュニティとはどのようなものかについて学んだ。
7月8日	探究テーマの検討	各自のテーマを選択し、グループに分かれてテーマに関する疑問等をブレインストーミングをして、考えを掘り下げた。
7月15日～ 8月26日	研究計画書の作成	7月15日には、外部講師（とわだコミュニティをみんなですすめ隊）を招き、研究計画書を作成した。その後、夏季休業中にテーマに関する情報を事務所訪問などを行い、収集した。
9月16日	プロジェクト	終日、各グループで計画したセーフコミュニティに向けた取組を実践した。当初は、校外での活動を予定していたが、新型コロナウイルス感染予防の観点から校内で実施できる内容に変更した。
10月30・31日	学校祭（三農祭）での発表	プロジェクト実施後の取組や成果について振り返り、スライドにまとめたものを三農祭普通科展で展示した。
11月18日	プレゼン研修	12月の発表会に向けて、プレゼンテーションの方法等について、外部講師を招いて研修を行った。
12月15日	普通科発表会	各グループの研究成果をプレゼンテーションソフトを活用し、発表した。外部講師（大学教員、県教育委員会指導主事、十和田市役所職員、とわだセーフコミュニティをみんなですすめ隊員、保育園園長、民間会社社長）を招き、発表に対する講評をもらった。

4 総探に関するアンケート調査の実施

(1) 生徒へのアンケート調査

ア アンケートの作成

佐藤（2021）の総探を通して育成された資質・能力に対する高校生の意識に関する調査を参考にして、16項目のアンケートを作成した。アンケートの質問①～⑩は、4件法（「そう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」）での回答、質問⑪は自由記述とした。質問①～⑩は、観点別学習状況の評価の観点に基づく内容とし、生徒自身がどのような資質・能力を身に付けていると感じているのかを把握するようにした。質問⑪～⑯については、総探を運営する上で、生徒がこの学習活動をどのように位置付けているのかを知るために設定した。

イ 調査時期および回答数

アンケートは普通科発表会終了後の12月16日（木）に普通科1学年70名を対象にGoogleフォームで実施し、全員から回答を得ることができた。

(2) 生徒へのアンケート調査の結果と考察

アンケート調査結果について、「そう思う」「ややそう思う」を「肯定的回答」、「あまりそう思わない」「そう思わない」を「否定的回答」として考察した。

ア 「知識・技能」に関すること

「知識・技能」について、質問①では約8割、②と③では約9割が肯定的回答となった。質問①では教科学習と総探との関連を実感していないという回答が約2割であった。教科横断的な観点からの指導

や学習活動の設定の工夫が今後の課題になると思われる。しかし、今年度も国語や家庭、情報の授業場で総探と関連付ける学習活動を設定したことがあった。総探の探究活動の中で教科の知識を活用するような場面を設定していくことで、高度な学びにつながる事が予想される。

表3 生徒へのアンケート調査における質問および結果

視点	番号	質問内容	回答	人数	割合(%)	視点	番号	質問内容	回答	人数	割合(%)
「知識・技能」に関する事	①	教科で学んだことを、総合的な探究の時間で生かすことができた。	1	28	40.0	その他	⑪	総合的な探究の時間は生きていくうえで大切なことを学んでいると思う。	1	33	47.1
			2	27	38.6				2	35	50.0
			3	12	17.1				3	1	1.4
	②	今後の自分の生活に役立つ知識を得ることができた。	4	3	4.3		4	1	1.4		
			1	40	57.1		1	33	47.1		
			2	27	38.6		2	31	44.3		
	③	課題解決に役立つ情報かどうかを考えながら、情報を集めることができた。	3	2	2.9		3	5	7.1		
			4	1	1.4		4	1	1.4		
			1	42	60.0		1	39	55.7		
「思考・判断・表現」に関する事	④	情報を集めた後、さらにほかの情報を集めて確かめたり、比べたりした。また情報から特徴を読み取り、その原因について考えるなどして自分の考えを広めることができた。	2	25	35.7	⑬	総合的な探究の時間は、今まであまり考えなかった問題に取り組んでいる。	2	29	41.4	
			3	2	2.9			3	2	2.9	
			4	1	1.4			4	0	0.0	
	⑤	課題の原因や状況を理解して、課題解決のための自分の考えをもつことができた。	1	26	37.1	⑭	総合的な探究の時間と教科の学習はつながっていると感じている。	1	20	28.6	
			2	37	52.9			2	33	47.1	
			3	5	7.1			3	15	21.4	
	⑥	自分の考えを根拠を示して整理し、資料にまとめ発表することができた。	4	2	2.9	4	2	2.9			
			1	29	41.4	1	32	45.7			
			2	36	51.4	2	33	47.1			
「主体的に学習に取り組む態度」に関する事	⑦	グループでの話し合いのときに、お互いの良さや違いを認め、協力することができた。	3	4	5.7	⑮	総合的な探究の時間で学んだことは、普段の自分の生活や将来に役立つと思う。	3	4	5.7	
			4	1	1.4			4	1	1.4	
			1	30	42.9			1	32	45.7	
	⑧	自分の考えを根拠を示して整理し、資料にまとめ発表することができた。	2	35	50.0	⑯	中学校での「総合的な学習の時間」と高校での「総合的な探究の時間」の違いについて、自分が思うことを書いてください。 ・わからない。 ・中学校では先生が用意した課題やテーマについて調べたが、高校では課題を自分で考えて決めるところが違う。 ・「総合的な学習の時間」は、ある答えに辿り着くために学習し、探究の時間では、もっと視野を広げて、改善を重ねる。 ・地域の人との関わりが中学校のときよりも深まった。 ・先生たちが主になってやっているか、生徒が主になっているか。 ・中学校の時は、ここまで本格的ではなかった。今は楽しい。 ・高校の「総合的な探究の時間」は、友達と実際に活動するなど、とても新鮮だった。友達との仲を深めることができた。 ・自分たちで調べたことをスライドで見やすくまとめること。 ・活動範囲が広いこと、自分たちで活動することが多いこと。 ※質問①～⑯の回答番号は以下のとおり設定した。 1 そう思う 2 ややそう思う 3 あまりそう思わない 4 そう思わない ※質問⑯は複数記述があったものを掲載している。				
			3	4	5.7			3	4	5.7	
			4	1	1.4			4	1	1.4	
	⑨	自分の考えを根拠を示して整理し、資料にまとめ発表することができた。	1	52	74.3	⑰	中学校での「総合的な学習の時間」と高校での「総合的な探究の時間」の違いについて、自分が思うことを書いてください。 ・わからない。 ・中学校では先生が用意した課題やテーマについて調べたが、高校では課題を自分で考えて決めるところが違う。 ・「総合的な学習の時間」は、ある答えに辿り着くために学習し、探究の時間では、もっと視野を広げて、改善を重ねる。 ・地域の人との関わりが中学校のときよりも深まった。 ・先生たちが主になってやっているか、生徒が主になっているか。 ・中学校の時は、ここまで本格的ではなかった。今は楽しい。 ・高校の「総合的な探究の時間」は、友達と実際に活動するなど、とても新鮮だった。友達との仲を深めることができた。 ・自分たちで調べたことをスライドで見やすくまとめること。 ・活動範囲が広いこと、自分たちで活動することが多いこと。 ※質問①～⑯の回答番号は以下のとおり設定した。 1 そう思う 2 ややそう思う 3 あまりそう思わない 4 そう思わない ※質問⑯は複数記述があったものを掲載している。				
			2	16	22.9			1	32	45.7	
			3	2	2.9			2	33	47.1	
⑩	グループでの話し合いのときに、お互いの良さや違いを認め、協力することができた。	4	0	0.0	3	4	5.7				
		1	21	30.0	4	1	1.4				
		2	36	51.4	1	32	45.7				
⑪	自分の生活以外に、社会や地域が抱える問題に興味をもつようになった。	3	10	14.3	⑱	総合的な探究の時間と教科の学習はつながっていると感じている。	3	15	21.4		
		4	3	4.3			4	2	2.9		
		1	18	25.7			1	32	45.7		
⑫	自分の生活以外に、社会や地域が抱える問題に興味をもつようになった。	2	41	58.6	⑲	総合的な探究の時間と教科の学習はつながっていると感じている。	2	33	47.1		
		3	9	12.9			3	4	5.7		
		4	2	2.9			4	1	1.4		
⑬	地域社会の一員として、自分ができることがないか考えるようになった。	1	18	25.7	⑳	総合的な探究の時間で学んだことは、普段の自分の生活や将来に役立つと思う。	1	32	45.7		
		2	41	58.6			2	33	47.1		
		3	9	12.9			3	4	5.7		
⑭	社会や地域の課題解決に向け、主体的に活動したいと思うようになった。	4	2	2.9	4	1	1.4				
		1	20	28.6	1	32	45.7				
		2	40	57.1	2	33	47.1				
⑮	社会や地域の課題解決に向け、主体的に活動したいと思うようになった。	3	8	11.4	㉑	総合的な探究の時間で学んだことは、普段の自分の生活や将来に役立つと思う。	3	4	5.7		
		4	2	2.9			4	1	1.4		
		1	20	28.6			1	32	45.7		
⑯	社会や地域の課題解決に向け、主体的に活動したいと思うようになった。	2	40	57.1	㉒	総合的な探究の時間で学んだことは、普段の自分の生活や将来に役立つと思う。	2	33	47.1		
		3	8	11.4			3	4	5.7		
		4	2	2.9			4	1	1.4		

イ 「思考・判断・表現」に関する事

「思考・判断・表現」について、質問④～⑥において約9割が肯定的回答であった。特に質問⑥の自分の考えを整理して、資料にまとめて発表することについては、多くの生徒がプレゼンテーションやスライドの提示の仕方について学んだことに意義を感じていることが、質問⑯の回答からうかがえる。

ウ 「主体的に学習に取り組む態度」に関する事

「主体的に学習に取り組む態度」については、質問⑧で約8割、それ以外では約9割が肯定的回答であった。特に質問⑦において、97.2%の生徒がグループ活動を協力的に進めることができたことと回答しており、グループという学習形態が、生徒にとって大きな教育効果をもたらしていることがわかる。また、社会や地域が抱える課題やその解決に向けて興味をもつようになったことが、質問⑧と⑩から読み取れる。2学年以降の学習において、この意識がさらに高まっていくことを期待したい。

エ その他

質問⑪から、大半の生徒が総探の学びの重要性を意識していることがわかる。「地域課題研究」という身近なテーマであるとともに、自己の在り方生き方と結び付けて考える礎を少しずつ築き始めていると思われる。また、多くの生徒が総探を学ぶ楽しさを実感していることが質問⑫の結果からうかがえる。

質問⑬から総探を通した学びに新鮮さを感じる生徒が97.1%いることがわかる。質問⑯の自由記述においても、学習活動の多様性や深い考察に言及している生徒が多数おり、広い視野に基づく学習の進め方に中学校での「総合的な学習の時間」との違いを感じているようである。また、質問⑱からは総探での学びが実生活に役立つと感じる生徒も9割以上いることがわかり、「学びに向かう力」の育成に影響していると言える。

質問⑲においては、上述したように質問①の結果と相関するが、教科学習と総探との関連性を意識している生徒の肯定的回答が75.7%であり、他の回答よりも少し低い結果となっている。総探において、教科学習で学んだことを結び付けるという意識がまだ定着していないと思われる。

最後に中学校の「総合的な学習の時間」と総探との違いについて、自由記述する質問を設定した。多くの生徒が、「総合的な学習の時間」では教師から与えられたテーマや課題について調べていたのに対し、総探は自分たちで課題を設定しなければならないこと、教師よりも生徒が主体になること、地域を捉える視点が広がったこと、グループで研究するということを述べていた。この結果は、探究のプロセス（①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現）が、総探でより高次に行われていることを示唆している。

(3) 教師へのアンケート調査

ア アンケートの作成

総探の成果と課題及び今後の指導改善の視点に関して、9項目からなるアンケートを作成した。質問①と②は、4件法（「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」）で回答し、適切な評価方法に関する質問⑧は「振り返りの内容」「発表資料の内容」「発表の様子」「活動に取り組む姿勢」の4つを選択肢とし、複数回答可とした上で、その他の項目も設定して記述欄を設けた。質問③～⑦、⑨については、自由記述とした。

イ 調査時期及び回答数

アンケートは総探を担当した教員を対象として令和4年2月にGoogleフォームで実施した。5名から回答を得ることができた。

(4) 教師へのアンケート調査の結果と考察

表4 質問①と②のアンケート調査結果

ア 総探の教育的効果と指導について

質問①、②では総探の教育的効果と指導について調査した。全教師が総探が生徒の成長に役立つと感じていることが、質問①からわかる。

一方で、指導に関して難しさを感じている教師も一定数いることが質問②からうかがえる。以下、今年度の総探について、「成果」「課題」「改善」「評価方法」「期待」という視点から質問③～⑨の調査結果（表5）を基に分析する。

番号	質問内容	回答	人数	割合(%)
①	「総合的な探究の時間」は生徒の成長に役立っている。	1	3	60.0
		2	2	40.0
		3	0	0.0
		4	0	0.0
②	「総合的な探究の時間」を指導することは難しい。	1	3	60.0
		2	1	20.0
		3	1	20.0
		4	0	0.0

イ 成果について

質問③、⑤、⑥が「成果」に関する項目である。まず、多くの教師がプレゼンテーション力の向上を成果として述べている。また、それに伴うスライド資料の作成方法を学んだことも成果としてあげられている。質問⑥では、プレゼンに関する研修を次年度の1年生にも継続するべきという意見が複数あった。

次に学校外の人々との交流が挙げられている。情報収集等のために校外の方へのアポイントメントの取り方や電話のかけ方、マナー等を学んだことが生徒の成長に繋がったという意見が見られた。他には、グループ活動を通して、生徒が主体的に活動できたことや、発表会に校外から様々な業種の講師者を招くことで緊張感をもって準備に臨むことができたことという意見もあった。

ウ 課題について

質問④、⑤が「課題」に関する項目である。課題設定場面における生徒の自主性を尊重する度合いや情報の収集・分析の仕方が挙げられている。特にテーマに対する課題の設定に苦戦する生徒が多く見られたため、指導の工夫の必要性について言及する意見が多く見られた。また、教師の指導に関する課題としては、指導力やICT端末の操作能力の差、教員間の意識共有、ルーブリックの活用方法などが挙げられていた。

エ 改善について

上述した「成果」と「課題」を踏まえて、次年度の総探（1学年と2学年）に向けての改善点について、質問⑦で調査した。課題設定や情報収集の指導のために副教材を活用することが述べられていた。また、評価規準としてのルーブリックを見直すという意見もあった。

オ 評価方法について

総探における適切な評価方法として、全教師が「振り返りの内容」や「発表資料の内容」を選択していた。また、「その他」の方法としては、「課題認識能力」「課題設定力」「課題解決力」「協調性」や「生徒との面談」という評価方法の記載もあった。今年度、総探における評価は、生徒が記載した「振り返りシート」や発表会での発表資料を基に行った。

表5 質問③～⑨のアンケート調査結果 ※表中のA～Eは回答者を示す

③今年度の「総合的な探究の時間」の成果は何だと思いますか。

回答	回答内容
A	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が自分たちで課題の解決策を考え、実行できたこと。 探究（課題設定、アクション、まとめ、発表）のプロセスの中で、生徒が自分から進んで発表の準備等を行ったこと。 プレゼンの方法を学び、スライドの作成能力を向上できたこと。 できる限り地域の方々と関わることにより、外部の方々との接し方を学んだこと。 地域の方々等を巻き込んだ発表会を開催したことで、生徒は外の目に触れるという緊張感から、発表に向けた準備に真剣に取り組めたこと。
B	コミュニケーション力・情報収集力・プレゼンテーション力が上がったこと。
C	プレゼンテーションの方法が分かったこと。
D	成果としては、生徒の成長(アボのとり方、電話のかけ方、学校外の人との関わり方、マナー、物事の手順、発表する力、自分の意見をもつ、調べ方、合意形成する力、協力する力、責任感など)に大きく繋がったと思う。また座学じゃないので、生徒は仲間と活動することを単純に楽しんでいてと思う。さらに自分たちの力でやり遂げた感覚が強いことと、活動を認めてもらう場面が多くあったことで、充実感を感じていたと思う。いろいろな班の活動を見ることで、他の班の良いところを見つけ、来年の総探(特に来年は自由テーマなので本当に楽しみにしているようだ)への意欲を見せていたことも、1つの成果と感じた。
E	生徒がプロジェクト学習のやり方を理解したこと。

④今年度の「総合的な探究の時間」の課題は何だと思いますか。

回答	回答内容
A	<ul style="list-style-type: none"> 1単位では足りず、課題に対するリサーチがインターネット上の検索で終わる班が多かったこと。 上記に関連して、リサーチの方法等について指導できなかったこと。 ループリックを作成したが、ループリック自体にも課題があり、うまく活用できなかったこと。 キャリアに関する取組があまりできなかったこと。
B	指導力の教師間格差・タブレット操作力の教師間格差。
C	テーマが限定されていること（生徒自身が探究したいテーマだったかどうか）。
D	<p>「課題への問題意識」…今年は探究のサイクルを理解させるために、事前にテーマが決まっていたこともあり、生徒たちは「主体的に」取り組んだ気持ちにはなれていないようだった。</p> <p>「課題の発見」…課題があるから、こう解決したいというよりは、やりたいことをやりたいという生徒が多いように感じた。探究の考え方や課題を地域の課題とつなげていくことを伝えることが難しいと感じた。</p> <p>「指導のバランス」…手をかけすぎても、かけなさすぎても生徒のためにならず、指導にあたって教員同士の共通理解が必要だと思った。どう指導したら良いか分からず、困っている先生も多かったと思う。</p>
E	総探を指導する教員側の考え方、指導方針を合わせることができなかった。それによって、生徒の活動に温度差ができてしまった。

⑤令和3年度入学生（現：1年生）の2年生での「総合的な探究の時間」に向けて、今年度の成果と課題を、どのように活かしたいと思いますか。

回答	回答内容
A	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が自分で考えて活動する部分と、必要な知識等を与える部分にメリハリをつけるため、次年度の2年生からは副教材を持たせる（啓林館『課題研究メソッド』）。 1年生と課題研究の流れはほぼ同じであり、その流れを生徒は理解しているため、説明等を省略できる部分は省略し、リサーチの方法等に関する指導の時間を設ける。 ループリックを見直す。特に、自らアクションを考え実行できたかを評価規準に入れる。
B	成果継続・課題改善のために、教師間で共通認識を図る機会を定期的に設ける。
C	生徒が自分で興味があること、探究したいことをテーマとして決め取り組ませたい。
D	探究担当者と共通理解を図りたい。また、生徒が課題を発見し、取り組みたくなる仕掛けが必要だと思った。来年度こそは生徒が主体的に取り組めるようにしたい。
E	生徒たちのプロジェクト活動に対する意欲、それをまとめ、プレゼンする意欲は高まっている。その生徒の思いを伸ばしていきたい。

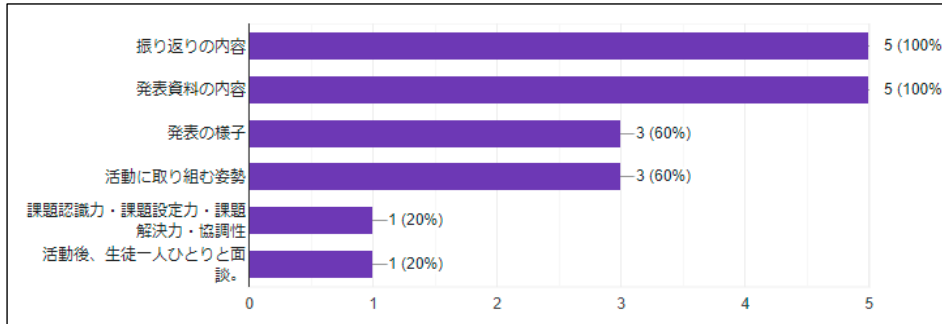
⑥令和4年度入学生（新1年生）の「総合的な探究の時間」に向けて、継続していくべきことは何だと思いますか。

回答	回答内容
A	<ul style="list-style-type: none"> 今年度は各教科担当者（国語、情報、家庭）の協力により、「総合的な探究の時間」に関連した学習内容について、各教科で指導していただいたが、カリキュラムマネジメントの観点から継続したい。 本校は三農祭、課題研究の発表会（「プロジェクトオブザイヤー」）といった行事があるので、行事に関連した総探の計画を進めたい。 課題研究の大まかな流れ、大テーマ（「三農生が取り組むセーフコミュニティ」）は継続させたい。
B	課題の適正設定・見通しがもてる年間計画設定。
C	プレゼンテーションの講義。
D	プレゼン研修は有効だと思った。また総合的な探究の時間の発表会は、生徒も緊張感を持って取り組んでいたことと、探究活動の目標があることで、目標に向かって頑張っていたと思う。
E	模擬プロジェクト活動を行い、方法を学ぶこと。 プレゼン方法を学ぶための、外部人材の活用。

⑦令和4年度入学生（新1年生）の「総合的な探究の時間」に向けて、改善点は何かと思いませんか。

回答	回答内容
A	・生徒が自分で考えて活動する部分と、必要な知識等を与える部分にメリハリをつけるため、次年度の2年生からは副教材を持たせる（啓林館『課題研究メソッド』）。なお、1年生も同じ副教材を持たせる予定である。 ・ルーブリックを見直す。特に、自らアクションを考え実行できたかを評価規準に入れる。
B	指導教員の適正配置とタブレット操作力の向上。
C	生徒が自分で探究したいテーマを自由に決めること。
D	今年はオンラインでやったものも多かったが、「聞こえない」「分からない」というのが、1番生徒にとって辛かったと思う。今後はオンラインももっと増えてくると思うので、実施する際はかなり事前準備が必要かもしれない。また、テーマの設定(大枠の中でも)が難しいと思うので、テーマ設定させるための工夫が必要かもしれない。
E	模擬プロジェクト活動の中で、外に出ていくこと。 課題解決に向けての情報収集の仕方。

⑧「総合的な探究の時間」の評価方法として適切だと思うものは何ですか。※複数回答可。



⑨「総合的な探究の時間」にどのような教育的効果を期待していますか。

回答	回答内容
A	・いわゆる普通教科では見られない生徒の主体的な頑張りを見る場面が多かった。これは「総合的な探究の時間」だからこそ見られる効果だと考える。 ・探究のプロセス（課題設定、調査、アクション、まとめ・発表という流れ）。 ・ある現象等に対するクリティカル・シンキング、クリティカル・リーディングの能力。具体的には、ある現象に対し主体的に疑問を投げかける力や、情報をうのみにせず真に正しい情報かを検討する力。 ・高等学校に限らず、小・中学校も含め学習した教科の内容について、それを活用する力。具体的には、国語であれば敬語の使い方、通知文の書き方、調査・発表の方法など。情報であれば、ワープロソフト、プレゼンテーションソフトの使い方、情報モラルなど。ほかにも今年度であれば火災予防の班は実際にコンセントを分解するなどして理科（物理）に関する学習ができたと思われる。
B	将来に?がるであろう課題認識力と課題解決力。
C	探究の見方や考え方を働かせて、課題を解決していくための資質や能力を育成すること。
D	主体的な学びに繋がるとても面白い授業だと思う。生徒のやる気を引き出し、生徒の能力(机上の知識だけでなく)を伸ばし、地域のためになることを期待している。
E	生徒が、自分の生活や地域社会に興味をもつこと。 そこから生まれる問題点に対して、自ら良くしたいと思い、行動する力。

カ 期待について

質問⑨において、総探に対する教育的効果を調査した。大半が「探究的な見方・考え方」を働かせることによって、課題認識力や課題解決力、批判的思考を身に付ける効果があると回答していた。また、生徒が主体的に活動することに対する期待もあった。総探を指導することへの困難さを感じつつも、全教師が教育的効果への期待を抱いていると考える。

5 アンケート調査結果の考察

生徒と教師のアンケート結果を比較し、その共通点などについて概観する。生徒も教師も「総探」を積極的に捉えているという共通点がうかがえ、両者とも学びの実感を感じていることがわかる。具体的には、上述したとおり、プレゼンテーション能力やグループ活動を通しての協動的な学びの成果、プレゼン用スライドのまとめ方である。また、校外の地域人材との交流についても、マナーや情報収集の工夫などを学んだ意義を実感している。

今後の課題及び改善の視点となり得るものとしては、第一に課題設定の工夫についてである。与えられたテーマの範囲で自分たちで課題を設定することに生徒が難しさを感じているとともに、教師も生徒の主体性・自主性を生かした指導の工夫の必要性を感じている。探究学習における生徒の課題設定場面をどのように指導するのかは、全国の高校からもその困難さや実践例が示されているが、粘り強く計画的・継続的に取り組んで行く必要があることがアンケート調査結果からうかがえる。

第二は、教科学習との関連性についてである。上述したが、生徒のアンケート調査結果において他の質問項目よりも否定的項目の割合が高かった。また、教師アンケートの質問⑥に学習内容についてカリキュラム・マネジメントの視点から各教科における継続的な指導の必要性を求めるものが見られた。高等学校学習指導要領解説においても、総探を教育課程の中核に据えて、学習の効果の最大化を計るカリキュラム・マネジメントを確立することの重要性が示されており、各教科・科目等との関わりを意識することで、より高い教育的効果が期待できると示されている。

IV 研究のまとめ

本研究のまとめとして、今回のアンケート調査の結果と考察を踏まえて、「指導と評価の一体化」という視点から、学習指導要領等で示されている育成すべき資質・能力および評価規準を基に、今後、生徒の学習改善と教師の指導改善にどのような可能性があるのかについて私案を述べていきたい。

(1) 総探における評価規準

総探は、学習指導要領に定められる目標を踏まえて各学校が目標や内容を定めることになっている。そして、評価の観点も各教科・科目等と同様に「内容のまとまりごと」に「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の各観点に基づき評価することになる。各観点において評価規準を設定するポイントは以下のとおりである（文部科学省 国立教育政策研究所 2021 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校 総合的な探究の時間』、東洋館出版社）。

ア 知識・技能

「①概念的な知識の獲得」「②自在に活用することが可能な技能の獲得」「③探究のよさの理解」の三つに関する評価規準の作成を考慮することができる。

知識については、事実に関する知識を関連付けて構造化し、統合された概念として形成されることが期待されている。よって、概念的な知識を獲得している生徒の姿を評価規準として設定することが考えられる。技能については、手順に関する知識を関連付けて構造化し、特定の場面や状況だけではなく日常の様々な場面や状況で活用可能な技能として身に付けることが期待されている。したがって、身に付いた技能が、いつでも、滑らかに、安定して、素早く行われているなどの生徒の姿を評価規準として設定することが考えられる。

また、総探においては、知識・技能とともに、探究の意義や価値の理解として、資質・能力の変容を自覚すること、学習対象に対する認識が高まること、学習が生活とつながること、探究を自律的に進めるようになることなどを、探究してきたことと結び付けて理解することが期待されている。したがって、探究の意義や価値を理解しているなどの生徒の姿を評価規準として設定することが考えられる。

イ 思考・判断・表現

「①課題の設定」「②情報の収集」「③整理・分析」「④まとめ・表現」という探究の過程で育成される資質・能力を生徒の姿として示して、評価規準を作成することが考えられる。

「①課題の設定」については、実社会や実生活における諸問題に向き合って、自らの力で解決の方向を明らかにし、見通しをもって計画的に取り組むことができるようになることが期待されている。「②情報の収集」については、情報収集の手段を意図的・計画的に用いたり、解決の過程や結果を見通したりして、多様で効率的な情報収集が行われるようになることが期待されている。「③整理・分析」については、収集した情報を取捨選択すること、情報の傾向を見つけること、複数の情報を組み合わせて新しい関係を見いだすことなどが期待されている。そして、「④まとめ・表現」については、整理・分析した結果や自分の考えをまとめたり他者に伝えたりすること、振り返ることで対象や自分自身に対する理解が深まることなどが期待されている。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

「主体的に学習に取り組む態度」の観点については、「粘り強さ」と「学習の調整」を重視することになっている。これらは、自他を尊重する「①自己理解・他者理解」、自ら取り組んだり力を合わせた「②主体性・協働性」、未来に向かって継続的に社会に関わろうとする「③将来展望・社会参画」などについて育成される資質・能力を生徒の姿として示し、評価規準を作成することが考えられる。

(2) 「地域課題研究」における評価規準の私案

以上の各観点のポイントと生徒と教師へのアンケート調査の結果を基に、今年度、三本木農業恵拓高等学校で実施した単元「地域課題研究」の評価規準の私案を作成してみた（表6）。

表6 単元の評価規準の私案

単元名	単元の評価規準		
	評価の観点		
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
三農生が考えるセーフコミュニティ	①セーフコミュニティを阻害する原因などを把握し、解決すべき課題について理解している。 ②セーフコミュニティを進めるために必要な情報を、諸資料から読み取ったり、インターネット等から適切な情報を収集したりしている。 ③セーフコミュニティについての理解は、自らの課題意識の中で探究してきたことの成果であることに気付いている。	①セーフコミュニティについて、与えられたテーマに関する調査活動を通して、セーフコミュニティを進める上での課題を明らかにし、課題解決のための仮説を基に見通しをもっている。 ②セーフコミュニティを進めるために必要な情報を、目的に応じて効果的な手段を選択して収集している。 ③収集した情報を多角的な視点で比較及び分類するとともに「現実性」と「実効性」などを根拠に基にアクションプランを作成している。 ④課題解決に向けたアクションプランをスライドにまとめ、魅力的なプレゼンテーションを通して表現している。	①セーフコミュニティを進めるために課題解決に向けて、積極的に探究活動に取り組もうとしている。 ②グループで協力して課題解決に向けたアクションプランを考えようとしている。 ③十和田市のセーフコミュニティを進めるために、地域社会の一員としての自覚をもって、安全で住みやすい社会づくりに貢献し続けようとしている。

この評価規準は、アンケート調査結果から得られた情報を基に作成したもので、次年度（令和4年度）の1学年での評価場面を想定している。言うまでもなく、学校の実情や生徒の実態の把握に乏しい筆者による私案なので、活用については現実的でない部分が多々あると思われる。しかし、作成する上で今年度の総探に対する生徒と教師の両視点から得た成果と課題についての情報は大いに示唆に富むものであった。

(3)「指導と評価の一体化」の実現に向けて

新学習指導要領では、学習評価の基本的な考え方として、「カリキュラム・マネジメントの一環としての指導と評価」、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善と評価が示されている。それは、Plan（指導計画等の作成）、Do（指導計画を踏まえた教育の実施）、Check（生徒の学習状況、指導計画等の評価）、Action（授業や指導計画等の改善）を往還させることで実現できる。学習評価というと、生徒の学習状況を数値化・記号化するいわゆる総括的評価が重視されがちであるが、成績をA、B、Cの観点別学習状況の評価や5段階の評定で示さない総探においては、「改善」のための形成的評価がより重要であると考えられる。

本研究においては、生徒と教師の両視点を基に効果的な「学習改善」および「指導改善」の可能性を検討した。従来、総探においては指導方法や指導体制など教師の視点に重きを置いた研究や先行実践が多かったが、教師のみならず生徒の視点も取り入れることで、より具体的な「改善」の方向性を見いだすことに一定度の効果を確認できた。

今回は、単年度という短期間かつ研究協力校1校という少規模での分析・検討しか行うことができなかった。今後は、3年間という長期的で複数校を対象とした研究を進める必要がある。同じ学校においても、生徒が変われば指導と評価の計画も常にリニューアルしなければいけないのは自明の理である。教師のみの一方的な視点ではなく、学びの主体である生徒の視点も活用した「指導と評価の一体化」を持続していくことが求められる。

本研究をまとめるにあたり、御協力いただきました三本木農業恵拓高等学校の遠藤校長先生並びに関係いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。

<参考文献>

- 1 文部科学省 2019 『高等学校学習指導要領解説総合的な探究の時間編（平成30年7月）』
- 2 文部科学省 中央教育審議会 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）』（平成28年12月）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2022.3.2)
- 3 大瀬幸治 2021 「『総合的な探究の時間』の推進要因に関する一考察－青森県の高등학교におけるアンケート調査の結果から－」『弘前大学教育学部研究紀要クロスロード 第25号(通巻第65号)』
- 4 佐藤和彦 2021 「総合的な探究の時間を通して育成された資質・能力に対する高校生の意識」『山形大学院教育実践研究科年報第12号』
- 5 文部科学省 国立教育政策研究所 2021 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校 総合的な探究の時間』東洋館出版社